

システム開発論文特集の発行にあたって



システム開発論文特集編集委員会

委員長 山口 修

情報・システムソサイエティの会員の方々は、要素技術や理論の研究と並んで、それらをベースとしたシステムの開発にも大きな時間を投入している。各要素技術を組み合わせて実システムとして具現化する際、システムの構築・運用で蓄積されたノウハウや利用者からのフィードバックは要素技術や理論の研究にとっても貴重な知見となる。既存技術の組み合わせであってもイノベーションとして新たな価値を生み出すシステム開発の重要性に焦点を当てるため、情報・システムソサイエティでは、システム開発論文として通常論文とは異なる基準を設けて査読している。2013年からはISSのソサイエティ論文賞の受賞対象としてシステム開発論文が追加されており、更なる活性化を図る必要があると考え、今回の企画となった。システム開発論文は、過去、2001年、2005年、2010年、2013年と過去4回特集を企画・刊行しており、今回は5回目となる。前回と同様に、編集委員には和文論文誌編集委員会総員があたるという体制を作り、2016年12月に論文募集を開始、2017年4月に投稿締め切りを定めた。合計41編の投稿があったが、これは、前回の100編の投稿数と比較すると大幅に下回っている。近年の特集の中では相対的に多い件数とのことであるが、絶対数が少なくなったことは残念である。6月に第一回査読、8月に第二回査読を行い、最終的に13編の論文を採択した。投稿論文の分野は多岐にわたっているが、分野別の採録件数で見ると、画像認識・コンピュータビジョンが多い。また、著者が企業所属である投稿の割合が通常論文と比べて多くなっているのも本特集の特色である。採択率は、前回の特集、ならびに通常号より多少

低くなったため、不採録となった論文についての理由を俯瞰してみた。まず、評価のポイントである「システム」の「新規性」「有効性」が十分に論じられておらず、研究の位置づけが不明確な論文は評点が低くなっている。また、総花的な解説になっており、工夫した点を読み取れないなどの「了解性」に欠けるもの、システムが目的としている効果に対する評価が十分ではないなど「信頼性」が担保されていないとの不採録理由も多く見られた。研究の位置づけを見直して整理すれば「有効性」や「了解性」が改善される、といった論文が多くあったことから、これらの再投稿を期待したい。

また、読者の方々には、システム開発の苦労を共有して頂くとともに、今後の研究開発の参考にして頂ければと願う。

最後に、本特集を発行するにあたり、御投稿頂いた執筆者の方々、タイトなスケジュールの中、丁寧な査読を頂いた査読委員の皆様、企画編集に尽力頂いた特集編集幹事、編集委員の皆様、ならびにサポート頂いた事務局の皆様には心より感謝申し上げます。

今後も、継続的かつ頻度を増して、システム開発論文特集が企画されることを期待する。

やまぐち おさむ
山口 修（正員：シニア会員） 1992年岡山大・情報卒。1994年同大大学院工学研究科了。同年株式会社東芝入社。現在、同社研究開発センターメディアAIラボラトリー研究主幹。コンピュータビジョン・パターン認識・顔画像認識の研究に従事。1996年情報処理学会全国大会優秀賞、2002年本会論文賞、2003年情報処理学会山下記念研究賞受賞。本会和文論文誌D編集副委員長（2013.5～2014.6）。

システム開発論文特集編集委員会

委員	長 幹 事 員	山	口	修	・	鈴	木	仲	崇	・	吉	本	潤	一	郎	・	市	ヶ	谷	敦	郎	
		岩	野	司	・	秋	岡	明	香	・	石	井	雅	博	・	籠	嶋	嶋	原	岳	彦	
委	員	青	西	亨	・	衛	藤	将	史	・	角	川	裕	次	・	栗	原	向	慎	隆	司	
幹	事	岩	田	治	・	木	村	昭	悟	・	倉	立	尚	明	・	酒	崎	田	隆	明	宏	
委	員	河	田	樹	・	小	尻	智	子	・	小	林	信	匠	・	篠	中	下	明	夫	夫	
		合	田	生	・	佐	藤	和	和	・	佐	藤	夫	夫	・	中	平	田	隆	夫	夫	
		佐	藤	成	・	中	尾	克	恵	・	二	宮	崇	亮	・	山	下	隆	明	夫	夫	
		蘭	田	郎	・	長	谷	光	忍	・	原	口	亮	幸	・	山	下	隆	明	夫	夫	
		中	村	豊	・	三	川	洋	也	・	光	原	幸	也	・	山	下	隆	明	夫	夫	
		福	田	治	・	吉	浦	智	史	・	渡	辺	哲									
		横	川	教	・		田	尚														